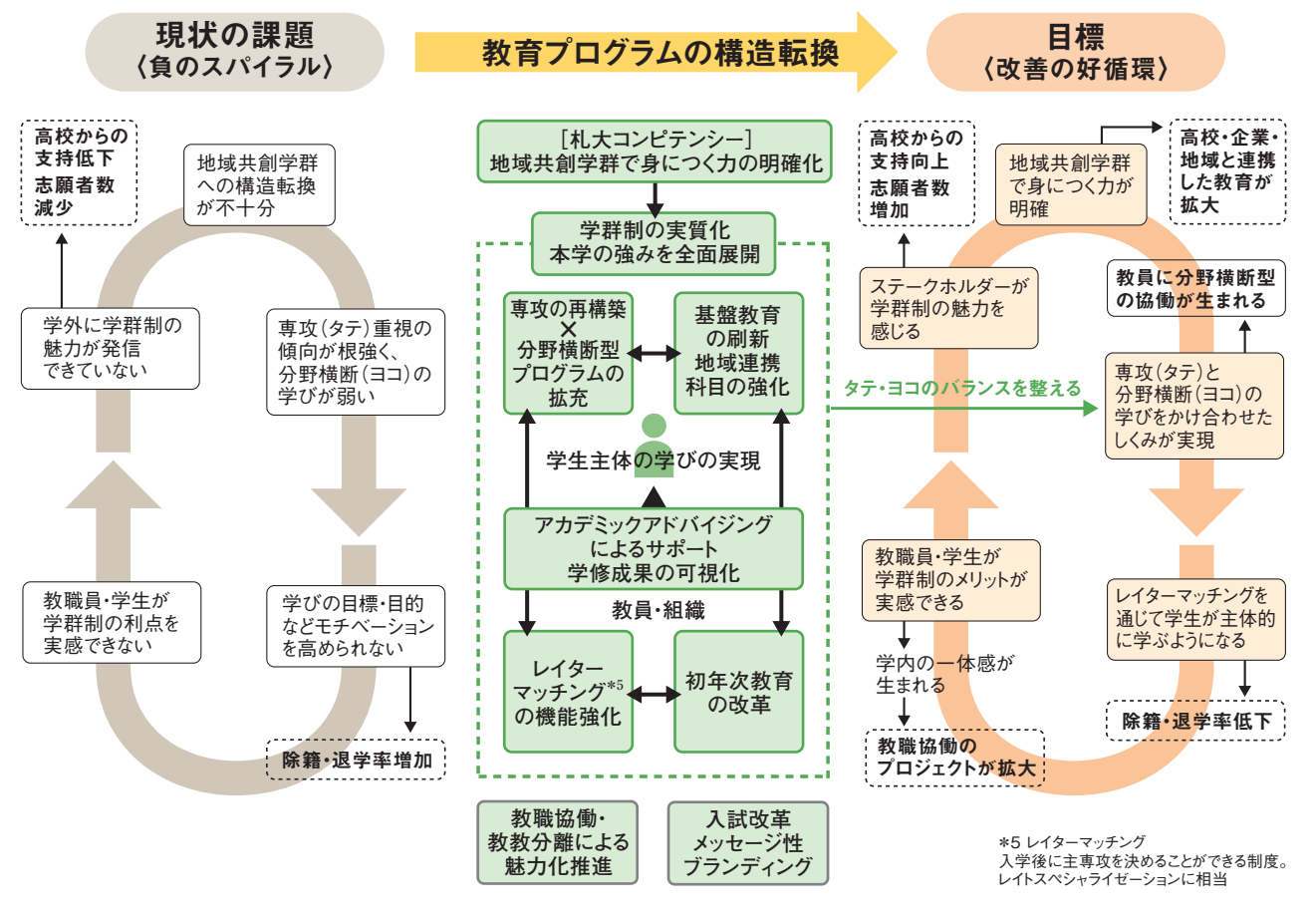




キャンパス／北海道札幌市 学生数／2,871人 設置者／学校法人札幌大学 創立／1967年
建学の精神／生気あふれる開拓者精神
学部／地域共創学群 人間社会学域(専攻:経済学、経営学、法学、英語、歴史文化、日本語・日本文化、スポーツ文化、リベラルアーツ)
大学院／地域・文化科学研究科

経営改革支援事業をきっかけとする教育改革のイメージ図



注目！ 新評価制度を見据え教職協働で進める 経営改革支援事業と教育の質向上

長年、大学運営を担ってきた秋山一二三事務局長は「今、注目を集める分野横断型の学びをいち早く取り入れた先見性が、教育成果や経営改善につながらない状況を打破したい」と語る。経営改革支援事業選定後の学内理解を一層進める必要性を感じた同氏は、幹部職員を集めて議論。札幌大コンピテンシーの実質化に向けた段取りから事業の進捗と並行した学生募集まで幅広く議論。タスクの細分化と共に計画の理解を深めた。現在は「新たな評価」制度も見据え、カリキュラムの骨格を描く教職協働の研修会を定期的に開催している。

「カリキュラム改編により科目の精選が進む見込みで、教員の研究時間増が期待できる。地域ニーズやDP上必要な分野の教員は、クロスアポイントメント制度を活用し、教育の質向上と共にコストも抑えたい」(秋山氏)。「入門演習」などの初年次教育改革効果で除籍・退学率は2023年度の5.98%から、その後4.18%まで改善。早速教育改革が経営改善につながっている。「改革の様子や成長した学生を積極的に発信し、学生募集にも結びつけたい」。

質向上に向けた学内の議論が活発化



幹部職員が集まり、3つのポリシーの再設定、新カリキュラム構築、学生募集まで計画案を議論。



教育の質向上を根付かせるために行っているSD研修会。若手からベテランまで熱心に議論する。

経営改革支援事業に挑戦し 成果の出る教育改革へ

CASE STUDY

札幌大学

先進的な教育のしくみを整えたものの、理解、活用が広がらず、募集状況も低調に。経営改革支援事業*1を契機に、「改善の好循環」をめざして構造転換を推し進める。



地域共創教育機構 准教授 学長政策担当部長

荒木 俊博

あらきとしひろ ●民間企業を経て2006年淑徳大学に入職。企画部門で教学マネジメントや内部質保証業務に関わる。2017年桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科修了。2025年札幌大学に専門員として入職。2026年より現職。

意欲的な改革をするも 負のスパイラルに陥る

本学は、予測困難な時代に合う多様な教育のしくみを整えるべく、2013年度、5学部6学科を1学群13専攻*2に改組。入学後に専攻を選べるレイターマッチング、分野横断の学びを可能にする副専攻制度や全専攻横断型プログラムなど、思い切った教育改革に早くから取り組んできました。

多様な学びに引かれて入学する学生は増えたものの、除籍・退学率は全国平均を上回る状況が続きます。調査すると、教育のしくみをよく理解できぬまま、希望の専攻を選ばずに学びを断念する学生の実態が確認できました。履修登録や各種プログラムへの参加は学生任せで、「学び方のサポート」が不足していたのです。教職員自身も学群制の利点を実感・発信で

よき学修者を育てる 「学びの個人コーチ」

これまで反省から、組織的なアカデミックアドバイザー*3の必要性を実感していたものの、全学生への個別指導は現実的でなく、「学び方のサポート」自体を授業にする形がベストだと判断。1年次の正課科目「キャリア入門」を再構築し、職員と私の2人で担当しています。コンセプトは「学びの個人コーチ」。専攻選択に向けて学生が自身の興味関心を改めて見つめ直す、複数分野の学問を結びつけるような社会課題に有効かなどを、グループワークや事後課題を通して考えさせます。DPの見直しとカリキュラム刷新も推進中です。学生に身に付けてほしい力を定めた「札幌大コンピ

ておらず、学生募集に結びついていませんでした。このままでは：と追い込まれていたところに、文科省の経営改革支援事業が始まりました。今度こそ成果の出る改革をしよう、と「札幌大学魅力化構想」地域社会に貢献する人材を分野横断の学びで育成する学群制の構造改革」事業で応募し、選定。生き残りかけた挑戦に乗り出しました。

テンシー」を基に各専攻がDPを再設定し、その達成のために必要な科目を精選するという、アウトカムを意識した「逆向き設計」を進めています。

これらを教学上層部だけで進めず現場教員に自分事として取り組んでもらうべく、毎月ワークショップを開いています。まず、専攻ごとに育てたい人物像を議論してタグライン*4にまとめ、そこから自分たちで新しいDPを考え、それをCPに反映し、とスモールステップで進めています。参加者は回を追うごとに増え、現場教員にも意識が浸透してきています。

学修成果の測定方法についても議論中です。「成績評価の基準は従来通りでいいのか?」「今求められるコンピテンシーとは?」「直接評価と間接評価の最適な組み合わせ方は?」といった議論を経て、各教員が、DPを意識した科目設計や授業を行ってくれることを期待しています。

今回の改革を経てめざすのは、「教育の消費者」ではなく、「よき学修者」を育てる教育です。自分の意思で学ぶ内容を選び何かしら成長実感を得て卒業し、それを糧に地域を支えていく。地域に人材を輩出する大学としてやるべきことはまだ山ほどあります。

*1 令和6年度少子化時代を支える新たな私立大学等の経営改革支援(メニュー1:キラリと光る教育力)

*2 現在は8専攻 *3 学生が学びの方向性を考え、履修、学修、進路選択等を主体的に行えるように伴走する教育的支援

*4 企業、ブランド、商品等の価値や約束を端的に示す言葉